

ロリっ子と狼おじさん

俺のシェービングクリームどこ？

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人間×獣人、幼女とおっさんものが書きたかった。あとめぐみん。後悔はしてない。ロリおじ要素強め。ほとんど原作沿い。ただし、主人公はマジモンの獣人です。耳以外も獣。

# 目次

ロリっ子とおじさん（前）	1
ロリっ子とおじさん（後）	8
スキル教え☒（前）	16

ロリっ子とおじさん（前）

？太陽の光がさんさんと降り注ぎ、石造りの街を美しく照らす。

？ここは駆け出し冒険者の街、アクセル。多くの新米冒険者たちが腕を磨き、そして旅立っていく小さな街だ。

？時刻はお昼を少し過ぎた頃。腹を空かせているであろう相手の顔が頭にぼやぼや浮かび、すぐさま消える。

？たぶん待てなくなったらその場で他の物、食べてるだろうなと思っただからだ。……俺のツケで。

？腕の中にある紙袋を抱え直しながら、道を急ぐ。また自分の知らないうちに作られた山積みの皿を見るのは勘弁願いたい。あれはちよつとした恐怖体験だ。

？それに俺も腹が減ってる。特にこの、鼻腔をくすぐる匂いがたまらん。紙袋の中から漂ってきてるやつが。

？野菜たつぷりのクラムチャウダーに魚とチーズのフライ、しかも揚げたてほやほや。焼いたばかりのバゲットもある。

？手に入ったのは非常に幸運だったと言えるだろう。行列ができるくらい人気だし、いつもなら昼前には完売してるからな。あいつもきつと喜ぶぞ。

？人に紛れ、歩みを進める。右に曲がって、大通りに出たからか、人の流れが一気に多くなってきた。

？ほどなくして辿り着いたのは、アクセルの冒険者ギルド。酒場と併設された、この街でも特に大きな建物だ。

「いらっしやいませ。お仕事案内なら奥のカウンターへ、お食事なら空いているお席にどうぞ！」

？扉を開け中に入って進むと、ウェイトレスのひとりが愛想良く出迎えた。

？これに軽い会釈で応えて、多種多様な冒険者が行き交う店内を見渡す。

？ギルドは建物が大きいだけに中もかなり広い。さてさて、自称成長期の腹ぺこ娘はどこにいるのやら……。

? 右か、左か。……いや、斜め後ろか。目より鼻に頼った方が早かったな。

? 目的の少女、めぐみんは店の端にあるテーブル席にいた。紅魔族的格好いいポーズをとり、マントをたなびかせている。

? あと、見知らぬ少年少女と一緒にだ。新しいお友達だといいいんだが。

「我が名はめぐみん!? アークウイザードを生業とし、最強の攻撃魔法、爆裂魔法を操る者……!」

「……冷やかしに来たのか?」

「ち、違わい!」

? 反射的に片手で自分の目を覆ってしまう。ああ、めぐみん。お前ってやつは本当に。

? あれほど初対面の相手に紅魔族的格好いい自己紹介はよくないって、ほどほどに言い含めておいたのに。思わずため息をついてしまいそうになる。

「……その赤い瞳。あなたもしかして紅魔族?」

? 目ざとい少女がめぐみんの正体を見抜き、めぐみんは頷いて自分の冒険者カードを少女に手渡した。

? やれやれと首を振り、こっちに背を向けているめぐみんに歩み寄る。わざとらしく足音をたてながら。

?

「いかにも!? 私は紅魔族随一の魔法の使い手、めぐみん!? 我が必殺の魔法は山をも崩し、岩をも砕く!」

? あーあ、駄目だ。聞こえてねーなこりや。

「……と、いうわけで、優秀な魔法使いはいりませんか??……あー、えっと。今なら最高の弓使いもついてきますよ?」

「人をオマケ扱いするんじゃない」

? 俺の売り込みをする時だけ、なぜか自信なさげなめぐみんの頬を引っ張る。

「あ痛あつ——わ、バーゲストじゃないですか。ね、ね、見てくださいますよ、新しくパーティーに入れてくれそうな人たちですよ!」

？振り向き、そう言つてめぐみんは胸を張る。

「ね、カズマ、あの人すつごく怪しい感じなんですけど……」

「しつ、聞こえるだろ！」

？見てくださいよ、と紹介された少年少女たちは、俺の目の前でひそひそ話をしはじめた。

「見た感じあの子の保護者か。なら弓使い？」

「怪しすぎて最高の弓使いって感じじゃないんですけど？」

「いやでも弓装備してるぞ？」

？あの、なあ。もう少し見えない場所でやるとかそういう努力を……まあいいか。

？怪しい男つて印象は仕方ない。あつちは俺の素性を欠片も知らないわけだし。

？おまけにこっちは革製のガントレットやブーツで徹底的に肌を隠し、首元には厚手のスカーフ。目元まで隠れるフード姿だ。

？見える部分も狼を模した立体的な仮面を着けて隠してる。それもこれも事情があるんだが、そんなのは子どもを怖がらせる言い訳にならないだろう。

？軽く咳払いをする。めぐみんのためにも、まず簡単な自己紹介をした方がよさそうだな。

「俺はバーゲスト。レンジャー、紹介の通りちよいとした器用さが売りの弓使いだ。今は両親に代わって、この子の面倒を見ている」

「え、あーっと。どうも」

「うちの子がすまないね。……ほら、昼飯だ」

「わ、わ!?待ってました、いただきます！」

？紙袋を小さな両手で受け取り、めぐみんは嬉嬉として中身を取り出しはじめた。ちよつと待たせすぎたか。

？俺の分も残しておいてくれればいいんだが。……この様子じゃ食われかねないな。

「ああ、上級職を応募してるって話らしいが、うちのめぐみんを試してみてもどうだろう？」

？少年に自分の冒険者カードを渡して、めぐみんの代わりに売り込

み続ける。

「む……バーゲストもですよ、お忘れなく！」

「俺はいいんだよ。お前がパーティーに入って、立派にやっていけると判断したら里に帰る」

「つまりずっと一緒にいるわけじゃない。「そういう約束だ、お前の親父さんとの」と続けた俺に、めぐみんは不満そうに口を尖らせる。

「それ毎回言ってますけど、結局一緒にお試ししてくれますよね？」

「……心配なんだ。俺はお前がこんな時から見てるんだぞ？」

「それこそ赤ん坊の頃からだという気持ちを入れて、親指と人差し指で僅かな隙間を作ってみせると、めぐみんは鼻を鳴らした。

「どれだけ小さいんですか。言っておきますけど、まだ成長期ですから。せ、い、ちよ、う、き！」

「……この通り伸び代は十二分にある。どうだろうか？」

「うおい、なにか言いたいことがあるなら聞こうじゃないか。め、目を逸らすなあ！」

「俺の視線がどうにも彼女の癩に触ったのか、「うおおおおお！」と弱つちいハンマーパンチを胴に何発か食らわされるものの、文字通り痛くも痒くもない。

「これはそもそもめぐみんのパンチが弱々しいというのもあるし、俺がローブの下に革防具を着込んでいるからでもある。

「……その眼帯はどうしたんだ??怪我でもしてるのなら、こいつに治してもらったらどうだ？」

「この、この、このっ——ハッ。……フフ。これは、我が強大なる魔力を抑えるマジックアイテムであり……。もし、これが外されることがあれば……。その時は。この世に大いなる厄災がもたらされるだろう……！」

「殴り掛かる体勢から取り繕うようにポーズをとり、なにやら壮大なホラを吹くめぐみんの頬を、顎の下から片手でぷにぷにと掴む。咄嗟に。

「お前はまたそうやって……。嘘を言うな嘘を」

「あうえええ……」

「こいつの眼帯は紅魔族特有の……まあなんだ、ラッキーアイテム的な??オシャレアイテム的なやつだ、気にするな」

「?ほらさっさと食べとめぐみに促し、自分もバゲットに手を伸ばす。」

「?サクツと軽い塩気と素晴らしい香りが口の中に広がる。ああ、たしかにこいつはうまい。人気が出るわけだ。」

「……ええと。カズマに説明すると、彼女たち紅魔族は、生まれつき高い知力と強い魔力を持ち、大抵は魔法使いのエキスパートになる素質を秘めているわ——」

「ああ……それなんだが——」

「ば、バーゲスト、バーゲスト!?!これすつごく美味しいですよ、ひと口あげます!?!ほら!」

「おいやめ——」

「?無理やり魚とチーズのフライをねじ込まれ、口のまわりを油まみれにされる。」

「?今しがた、少女がめぐみんたち紅魔族の説明をしてたんで、とっても大事なことを補足しようとしたんだが。」

「??」

「紅魔族は、名前の由来となっている特徴的な赤い瞳と……。そして、それぞれが変な名前をしてるの」

「ふえ……んな名前とは失礼な。私から言わせれば、街の人たちの方が変な名前をしていると思うのです」

「……ちなみに、両親の名前を聞いてもいいか?」

「?少年に訊ねられたためぐみんが、マントをひるがえす。」

「母はゆいゆい。父はひよいぎぶろー!」

「「……………」」

「?まあ、そうなるとは思ったが。」

「?旧友の名前を聞かされた二人は、なんとも言えない表情で絶句する。」

「……とりあえず、この子の種族は質のいい魔法使いが多いんだよな??仲間にしてもいいか?」



「んー??私の両親の名前についてなにか言いたいことでも??んー?」

?少年と少女から俺たちの冒険者カードを返してもらい、憤慨しためぐみんをなだめる。

?相変わらず俺を見る目は訝しげだが、少女は「いいんじゃない?」と口を開いた。

「冒険者カードは偽造できないし、彼女は上級職の、強力な攻撃魔法を自在に使うアークウィザードで間違いないわ。カードにも、高い魔力値が記されてるし、これは期待できそう」

「おい」

「それにもし彼女の言う通り本当に爆裂魔法が使えるのなら、これは凄いいことよ??爆裂魔法は、習得が極めて難しいと言われる爆発系の、最上級クラスの魔法だもの」

「ちよつと、おい。彼女ではなく、私のことはちゃんと名前と呼んでほしい」

?抗議するめぐみんの口元を拭ってやりながら、自分のフライとバゲットを口の中に放り込み、咀嚼してスープと具を流し込む。

?よくそんなので本当に食事を楽しめてるのかと訊かれるが、昔からゆつくり食べてる時間を確保できなかったもんで、これで慣れてしまった。もうすっかり。

「レンジャーは……正直よくわからないわね。それくらいレアな上級職なの。わかっているのはアーチャーと、あといくつかの職のごった煮ってことくらいよ」

「ははは、せめて器用貧乏と言ってくれないか。ごちそうさま、美味かった。これなら倍払ってもいいな」

?初歩的な着火魔法を使い、ゴミを片付ける。

「俺は付き添い程度に考えてくれ。メインはあくまでめぐみんだ」

「あー、わかった。俺はカズマ。で、こっちはアクアだ。よろしくアークウィザード……と、レンジャーのバーゲスト……さん?」

「バーゲストで構わない」

「じゃ、バーゲストだな。よろしく」

「ああ、よろしく」

めぐみんはスーパの匙を啜えながら、カズマをじろつと見た。

## ロリっ子とおじさん（後）

？めぐみんなが食事を終えるのを待ち、俺たちはカズマ一行と共に街のすぐ外——広大な平原地帯へとやってきた。

？パーティーのお試しということ、カズマが選んだのはジャイアントトードの討伐。アクセルでも特に簡単といわれている、初心者向けのクエストだ。

「爆裂魔法は最強魔法。そのぶん、魔法を使うのに準備時間が結構かかります。いつもならばちま——バーゲストに頼んでいるところなのですが——」

？めぐみんながつかいかエルを指でさし示しながら、ジトつとした目でこちらを見る。

？なあ頼むからその杖をこっちに向けないでくれ。あと、バーゲスト以外の名前で呼んだら許さないからな。

「俺は付き添い」

？いつもなら四の五の言わずに頼まれてやるところなんだけどな。

？万一に備えて中距離用の弓に矢はつがえているが弦は引かず、あくまでめぐみんなの付き添いという形でこの場にいる。

「……らしいので、あのカエルの足止めをお願いします。準備が整うまで、少しでいいです」

？そうカズマたちに頼み、めぐみんなの頼みに頷いたカズマは、もう少し遠く離れた場所にいるカエルを見た。

？ジャイアントトードは家畜や農家、子どもをその長い舌でぺろつと丸呑みにするカエル型モンスターなのだが、打撃系の攻撃に強く金属を嫌うという特性がある。

？だが見た感じ、このパーティーに捕食を回避できそうな、金属製の装備を身につけているメンバーはいない。武器以外は全身革と布防具の俺も含めて……。おお。こいつはちと危ういな。

「遠い方のカエルを魔法の標的にしてくれ。寄ってきてる方は……。おい、行くぞアクア。今度こそリベンジだ。お前、一応は元ならなんだろ??たまには元ならたらの実力を見せてみる」

「元つてなに!??ちゃんとして現在進行形で女神よ私は!?アークプリーストは仮の姿よお!」

? そう叫びながら必死の形相で、カズマの首を絞めようと襲いかかるアクア。なんだかおかしな女の子だ。

? ……少しだけ、彼らにめぐみんを任せるのが不安になってきた。

あー、ところでその――

「……女神(って)?」

「……そう自称してる可哀想な子なんだ。たまーにこういったことを口走ることあるんだけど、できるだけそつとしておいてやって欲しい」

? あー、なるほど。頭がちよつと弱いんだな。納得。

? めぐみんも同じように思ったのか、俺よりも直接的に、同情を込めた目でアクアを見る。

? ただそれでとどめを刺されたのか、異変に気づいた俺が引き止める暇もなくアクアが動いた。

? 泣きべそをかきながら、ヤケクソ気味に拳を振り上げて、手前のカエルに向かって駆け出し、

「なによ。打撃が効きづらいカエルだけど、今度こそ女神の力を見せてやるわよ!?!見てなさいよカズマ!?!今のところ見せ場のない私だけど、今日こそは!」

? そう叫びながら、カエルに食われた。……また女神って言ったな。

? 仲間が食われたのに、カズマは焦る素振りを見せない。これっぽっちも。

? 正直驚いたよ、肝が据わってるな、と。冷静に弦を引き絞り、カエルの脳天に狙いを定め矢を放った。

? ジャイアントトードは捕食中動かなくなる。これは種として致命的な隙だが、そのぶんこいつらは大きく育つことで天敵を減らし、あつという間にウンザリするほど増えるのだ……バイ、どっかで読んだ専門書。

? 今こうしてアクアが食われたことで、カエルの動が止まったのは

たしかだが……。いや、まさかこれが足止めなのか？

？いよいよもつてこの環境にめぐみんを任せるのが不安になってきた俺だったが、自分の人生において一日一回の爆裂魔法をなによりも楽しみにしている彼女の頭に不安の文字はなく……。

「見ていてください。これが、人類が行える中で最も派手でかつ威力のある攻撃手段。……これこそが、究極の攻撃魔法です」

？魔法を詠唱するめぐみんだったが、俺はあのカエルのが既に気の毒に思えてきている。

？なぜなら、今から彼女が唱えようとしている魔法は、正しく究極の攻撃魔法であり、たかがデカ牛サイズ——もつとあるがそれくらい——のカエルにぶち込むような攻撃ではないからだ。

？詠唱の声が大きく、周囲に反響するにつれ、めぐみんのひとつ所に魔力が集まり、大気が震えはじめ。

？全身の毛が逆立ち本能が逃げるとガンガン警鐘を鳴らしまくるが、あくまでもいつものことだと理性でねじ伏せる。……一日一回だからな。

？余波で飛ばされちゃ可哀想だから、一応カズマの肩に腕を回してその場に固定してやる。ちと硬くて痛いかもしれんが。

「な、なんすか？」

「はは、ぶっ飛ばされないように気をつけとけ」

？杖の先に眩い魔力の光が灯り、めぐみんが可愛らしい目をいっばいに開く。

？あれを至近距離で耳にするのは鼓膜に悪いからな。こつそり自分にだけ、耳栓スキルを使っておこう。

？これ本来は相手の耳を潰すスキル。けど、こういう時も便利。ね。

「エクスプロージョン——ッ!!」

？杖からカエルへと放たれた光があつという間に膨れ上がり、瞬間、空気が勢いよく爆ぜた。目と鼻の先で可哀想なカエルだったものが飛び散ったそばから蒸発するのが見える。

？突風に煽られて仰向けにすつ転びそうになっているカズマを支

えてやりながら、俺は名もなきジャイアントトードにひっそりと冥福をお祈りしておいた。次はもうちよいマシなカエル生だといいな。

? 少なくとも爆裂魔法をぶち込まれるような生涯じゃなければ幾分かマシだ。それこそ、唐揚げにされる方がずっと。

「どーだー、すげーだろー!?!ははは、は!」

「なに?!?よく、聞こえない!」

? そりゃ、こっちもだ。口をパクパクさせているカズマをよそに、光と爆風は段々と落ち着いてくる。

? しばらくして爆煙が晴れると、カエルのいた場所を中心に、バカでかいクレーターができていた。相変わらずすげーわこりや。

「……す、すっげー。これが魔法かあ……」

? あ、なに言ってるかわからん。……耳栓スキル解除しとかにや。

? 感動しているカズマの隣で、めぐみんがふらつくのが見えた。うー、やっぱりそうなるよな。知ってたよ。

「……ダメそうか」

「ええ、ガス欠です……。ちよ、バーゲスト。ですからその、もう少し私を女の子らしく扱ってくださいよ……」

「……扱ってるよ」

? 彼女が倒れる前に寄って、小さくて細っこい体を小脇に抱えるようにして支えてやると、次の瞬間。

? ゴソゴソ……ボコツ——!

? 俺たちのすぐそば、足元から一匹のカエルが姿を現した。ぬめぬめした頭半分と前脚が見える。

? 最悪なのが、それを皮切りに次々と地中からカエルが這い出ようとしてるってこと。今の俺の攻撃じゃないんだけどな……。ちよつとヤバいかも。

「めぐみん!?!一旦離れて、距離を取ってから攻撃を……」

「すまない、それは無理なんだ。あー、理由は本人から聞いた方がいいだろう」

「え?!?ちよつ」

? 端的に説明すると、爆裂魔法をこの世界の誰よりも愛するめぐみ

んは爆裂魔法をぶっ放すと魔力が枯渇しぶっ倒れるのだ。よってどんなに好きでも一日に一回の楽しみというわけ。

?しかし今はそれを説明している時間も惜しい。カエルは鈍いが、出てくればその巨体でひとつ跳び。あつという間に距離を詰めるだろう。

?よって諸々の説明は省略し、めぐみんをカズマに受け渡す。落とすなよ、そいつは旧友の生きた家宝だ。

?それからいつの間やらカエルの口から逃げ果せ、そばで膝を抱えて座っていたアクアに走れるかどうか確認し、俺は腰の矢筒から矢を数本抜いた。

「バーゲストー、がーんばあってくださいーい……」

「おう。とにかく二人を連れてこの場から離れてくれ。ああ、なんなら帰ってくれても構わんよお」

?向かってくるカエルを眺めながら、どいつから狙うか考える。

「大丈夫ですよカズマ。置いてつてもぼち——バーゲストはきつちり私のもとに帰ってきますから。同じ数のアークグリフォンやシルバーバジリスクに囲まれても、日が暮れる前にお土産まで用意してくれます」

「な、なんだかよくわからないけど……いいんだな??あとから人だなしとか言うなよ?!」

「まさか。むしろめぐみんに傷のひとつでもつけてみる、カエルにぺろっと丸呑みされるより怖いぞ?」

?すぐ目前まで迫ってきているカエルを見て、カズマは黙って首を縦に振り振りめぐみんを抱え、アクアの手を引き街の方へ戦線離脱した。ちとケレン味、利かせすぎたか……。



「——と、いうわけで、正式にカズマのパーティーに入れてもらうことになりました」

?カエル共の脳天に一発ずつ食らわせて悠々と街に帰還を果たし

た俺に、風呂上がりらしいめぐみんがさらつとそう報告したのは、実に夕飯時前のこと。

?めぐみんへのお土産に、状態のよいカエル十五匹分——ぎつと七万五千エリスの売却手続きを済ませたあとのことだ。ついでにほしい釣られて出てきたカモノネギを生け捕りにして持ち帰った。

?ケージ片手にうきうき気分だったものの、パーティー加入の報せを聞かされた俺は、残念なことに『よかったな』とは言えなかった。

?本来なら強く抱きしめてやって、お祝いだと飯をたらふく食わせてやるくらいはするんだろうが、素直に喜べないにはワケがある。

?まずひとつは、その条件に俺の加入が含まれているってこと。

?そしてもうひとつは、めぐみんが駄々をこねたらしいということ。

?最後に、俺がパーティー入りしなきゃならないってこと。

「これから私とバーゲストは同じパーティーの仲間です。一緒に頑張りますよう！」

?いや、頑張りましたようじゃない。どうなってんだ？

「……カズマ、くん？」

「い、いやあ……その——」

?ぎぎ、ぎぎ……。

?錆びたブリキの人形のように俺が首を動かすと、カズマは気まずそうに笑った。まるで諦めろとでも言わんばかりの表情だ。

?カズマから事情を聞くに、まずめぐみんは自らの爆裂魔法しか使えないという実情を明かし、また今後も爆裂魔法以外の道に進む気はないと話したらしい。

?相変わらずの爆裂魔法ジャンキーっぷりには頭が痛い、それでも自分で全部話せたのは偉かった。あとでちゃんと褒める。

?褒めるのはいい。しかし悲しいかな、当然そんなアークウイザードを受け入れてくれるパーティーがあるはずもなく。

?俺がなっかなかに帰れなかったことからわかるように、カズマパーティーもまた最初はめぐみんの加入を拒否しようとした。……したのだが。



？ところが、今回は珍しくめぐみんがごねた。今までのパーティーは断られたらすっぱり諦めていたのに。

？理由はわからないが、とにかくカズマのパーティーが気に入ったとのことだった。男女比が素晴らしいとか、アクアはライバルになり得ないだとか……。

？あろうことか、今なら俺も正式に加入させると勝手に宣言までしてしまつたらしい。曰く紅魔の里随一——俺は紅魔族ではないので、紅魔族随一のくとはならない——狩人<sup>ハンター</sup>だと。

？当初はそれでも俺の事情を考え断ろうとしてくれたカズマだったが、なぜかそこでアクアが食いつき、

？——曰く、ひと狩りいこうぜ!と無駄にハイテンションだったそうな。俺に骨付き肉を焼いてもらいたいらしい——

？それに飽き足らずいくつか質問をし、そののちめぐみんと一緒になつて駄々をこねはじめたんだとか。

？なんなんだ、高いところから飛び降りても平気かだの、道草食つて回復したり持久力が増えたりするかだの、草食動物から肉を剥ぎ取つてその場で焼いて食うかだの……。

「それってパーティーの加入に関係あるのか??タフネスも薬草学もサバイバルも、狩人に限らず冒険者なら大抵が似たようなことやつてるもんだぞ?」

「あ、いや。あいつの場合、その狩人つてやつの意味がちよつと違うんだ。……ちなみにクエストで街から出る時、ホルンの音がしたりしないか?」

「ああ、お前もか。……そんな幻聴が聞こえたことは生まれてこの方、一度もないな」

「そ、そうか。いやなんかすまん……」

？狩人はともかく。往来で駄々をこねるめぐみんとアクアは人々の目を引き、カズマはひどく赤っ恥をかいたらしい。

？おまけにカズマが俺を見捨てたのだと言い、めぐみんがパーティーに入れてくれるならなんでもすると大声で口走つてしまったがために、カズマは街人からあらぬ疑いをかけられ、屈強な男性冒険

者が様子を見に来てしまう始末だったという。

「?これでカズマがめぐみんたちの要求を飲み領いてしまったことを、責められる人間がこの世のどこにいるだろう。……いないな。」

「こればかりは俺たちが悪いな。迷惑と不名誉な疑いをかけさせてすまなかつた。疑いは俺が晴らしておくし、めぐみんも叱っておく。それで……」

「?結局俺たちはパーティーに入るべきかどうか、最終確認をしようとする、カズマはすつと右手をこちらに出した。」

「ああ、パーティーには入ってくれど助かる。改めて俺はカズマ。よろしくな、バーゲスト」

「……きみは俺が思っていた以上に大人だな。よろしく、カズマ。猟犬並みの働きを期待してくれ!」

## スキル教え☒（前）

「なんだお前たち、ここにいたのか。……どうした？」

？俺たちのカズマパーティー正式加入が決まった、その翌日のこと。

？湯浴みを済ませた俺が冒険者ギルドに足を運ぶと、めぐみんとアクアがテーブル席で落ち込んでいた。

？二人とも心ここに有らずといった様子で、めぐみんはボソボソと独り言を呟いてるし、すぐ隣のアクアにしても、なぜか頭の上になみなみと水が注がれたコップを載せている。

？可愛らしい女性冒険者が男も連れずにいるということもあり目立っているが、整った容姿よりも奇っ怪さが勝り、ちよつかいを掛けられるなんてことにはなっていないようだ。

？……なんだか嫌な予感がするのは気の所為だろうか。

？俺に気づくとめぐみんは顔を上げ、ガタンツ——と勢いよく立ち上がった。

？それはもう、椅子の上に立つ勢いで。

「こらめぐみん、行儀が悪い——」

「私はロリっ子ですか？」

「……なんだと？」

？聞き慣れない言葉に首を傾げる。

？ろり……なんだって？

？俺の反応が気に入らなかつたのか、めぐみんはそのままローブの襟に両手をかけ、力強く引っ張った。

「違いますよね、違うって言うってください、違うって、早く、言えー！」「ああ、まあ……。お前がそこまで必死になって否定するんなら、違うんだらうよ。その、なんとかつてのは」

？宥めるように背中を叩きながら、わからないなりの答えを返す。

？めぐみんは興奮して気づいていない様子だったが、俺たちは今、互いの鼻先が触れるほどに顔が近い。

？それが人の目にどう映るかはさておき、年頃の女の子が気安くし

ていいことじゃないはずだ。

「当然です。私は、紅魔族随一の魔法の使い手。もう立派な大人なんですから」

？立派な大人ね。……大人に成長期はないぞ。

？それに立派な大人は人の胸ぐらを掴んだりもしない。

「それで、アクアはどうしたんだ？」

「アクアですか??えっと、最初にカズマがスキルのことを話しはじめ  
て……」

？俺から離れたためぐみんが、事の顛末を話してくれた。

？どうやらカズマがスキルを覚えたいと言い、なんやかんやあったらしい。

？爆裂魔法はさておき、アクアが教えようとしたスキルも嫌だとばつさり切り捨てたのだと。

？めぐみんから話を聞いているうちに、知らぬ間に元気を取り戻していたアクアが相槌を入れ、

「酷いと思わない!!?」

「いや、そこで俺に同意を求められても困るんだが……。ちなみになんなスキルを教えようとしたんだ？」

「なによ、気になるの?」

？思えば、これがアクアとした初めての会話らしい会話だったか。

？俺の素朴な疑問に、小さく鼻を鳴らし立ち上がる。

「しよーがないわね。いい、このコップをよく見てなさいよ。私のスキルはね、本来なら人に請われてやるようなものじゃないんだから」

？そう言っつて、アクアはテーブルの上に散らかっていた花の種を一粒手に取り、自分の頭の上にあるコップを指差した。

「さあご覧あれ、この種を指で弾いてコップに一発で入れるわよ。すると、あら不思議!!コップの水を吸い上げた種はによきによきと……」

？興味深げに眺めている俺の目の前で、アクアが指で種を弾き、頭の上のコップに入れる。

? 沈む種をじつと見ていると、あっという間に芽が出て成長し、瞬きをする暇もなく花をつけた。

「おお、大したものだ」

「でしよでしょ??頭でっかちなカズマにはわからない良さなんだから!」

? 素直に感心していると、ニマニマと笑いながらアクアが腰に手を当てる。

? たしかに凄いと思うが……。

? スキルポイントに余裕のない駆け出し冒険者に勧めるようなスキルじゃないな、もつと利便性に長けたものじゃないと。

? だが、凄いののはたしかだ。うん。

「そのスキルはどんな種でも育つのか」

「ええ、もちろん。けどなんでそんなこと聞くの?」

「そりやますます大したものだ。試しに……ほら、こいつなんかどうだろう?」

? 胸元のポケットから小瓶を抜き取り、細長い小瓶から種を幾らか出してアクアに渡す。

「これは?」

「あー、綺麗な花の種だな。青く透き通った花弁の——」

「あら、この水の女神たる私に相応しい花つてわけね!? 気が利くじゃない!」

「いや別にそこまで言っちゃないが……」

? 怪訝そうな顔で種を見ていたアクアだったが、俺の話聞いて目の色を変えた。

? 凶らずもその気にさせてしまったようだ。

? しかしまたそれ、女神か。

? そういえば例の悪名高いアクシズ教の女神も、名前はアクアとあったか……。

? 可哀想に、それで自分を本気で女神だと思い込んでしまってるんだな。

「さあさあ、ほら!? どんどん咲かせるわよ!」

? 調子づいたアクアが、初級水魔法と先のスキルを織り交ぜながら、次々と青い花を咲かせる。

? それはそれは見事な手際で、次第に動きが大きくなりはじめ、他の冒険者が足を止めて見ていくほどだ。

? ちなみに俺が渡したのは花卉が薬の原料になる花の種で、育てるのが難しい上に美しい花を咲かせるということもあり、種はもちろん花そのものもかなり値が張る。

? なるべく儉約をしたい俺は、これで材料の足しになれば、と思っただけなんだが。

? ああしてずらりと並べると圧巻だな……。

「どう?? 凄いでしょ!?!これが私にとっておき、『花鳥風月よ!』」

「わ——っ!」

「うぴっ!」

? 足を止めていた冒険者が一様に沸き、声にアクアが驚く。

「アクア様、もう一度!?!金なら払うので、どうかもう一度『花鳥風月』を!」

「ぼつか野郎、アクアさんには金より食い物だ!?!ですよね、アクアさん?!?奢りますから、是非もう一度『花鳥風月』を!」

? いや、見事だったとは思いますが、そこまでするか?

? ここには暇人しか居ないのか、口々に今のをもう一度見たいと言って押し寄せてくる。

? 最初は冒険者たちの圧に押され気味だったアクアも、彼らの目的がはつきりするにつれ、その表情は怯えよりもはつきり迷惑そうなものに変化していった。

「なんだか大変なことになってきましたね」

「ああ、そうだな。……昼過ぎの軽食にするか?」

「食べます」

? 近くにいた店員を呼び止め、手頃な軽食を頼む。

? あとで花の回収もおかないとな……。

「——あっ!?!ちよつとカズマ、やっと戻ってきたわね、元はと言えばあんたが……。って、その人どうしたの?」

? アクアの声に興味を引かれてそちらを向くと、カズマとその隣に二人の女性冒険者が立っていた。

? 銀髪の少女と、金髪の少女。

? そのうち銀髪の娘はなぜか目に涙を浮かべ、酷く落ち込んだ様子でいる。

? なんだかデジャブ……。

「うむ。クリスはカズマにぱんつを剥がれた上に有り金を奪われて、それで落ち込んでるだけだ」

「あんたなんてこと口走ってんだ!? 待てよ、おい待て。間違ってるけど、ほんと。……いやいや、バーゲストもめぐみんの手を離して、座ってくれ頼むから」

? 弁解しようとするカズマを、俺とめぐみんは白い目で見つめる。

? なにが違うって言うんだ。

? 見損なつたぞ、リーダー。

? あまりにも必死に引き止めるもんだから、つい言われた通りに座ってしまったが……。

? 少女から下着を剥いだ?? 有り金を奪り取った?

「公の場でいきなりぱんつ脱がされたからって、いつまでもめそめそしてちやいけないうね!? よし、ダクネス。あたし、悪いけど臨時で稼ぎのいいダンジョン探索に参加してくるよ!? 下着を人質にされて有り金失っちゃったしね!」

? クリスという少女の証言に目眩がして、俺は思わず頭を抱えた。

? 今の話が真実なのだとしたら、仮にも俺が参加しているパーティーのリーダーがだ、よもや下着泥棒を働いた上にゆすりにまで手を出すとは。

? このバーゲスト、一生の不覚だ……。

「おい、待てよ。なんかすでに、アクアたち以外の冒険者——特に女性冒険者達の目が厳しい物になってるからほんとに待って」

? よしわかった。

? このパーティーに居続けるのは、めぐみんの道德教育によくない。

？そう判断し、俺が再び彼女の手を取り席を立とうとした瞬間、クリスがくすくすと笑いはじめた。

「このくらいの逆襲はさせてね。それじゃあ、ちよつと稼いでくるから適当に遊んでいてねダクネス!?じゃ、いつてみようかな!」

？最初の印象とは打って変わって、クリスは冒険仲間募集の掲示板へと、清々しい笑顔を浮かべて行ってしまった。

？あー、つまり今までの話は彼女が大袈裟に言っただけなのか、そうか。

？苦々しい顔をしているカズマに向き直り、俺は頭を深く下げる。

「先日から重ね重ね、非礼を詫びる。うちのリーダーはゲスなんじゃないかと疑ってすまなかつた」

「いや……まあ、いいんだそれは。えっと、それよりもダクネスさんは行かないの?」

？なんだか歯に物が挟まったような物言いで謝罪を流されてしまった……。

？なるほど、カズマは心が広い。

？俺がした無礼を、すっかり水に流してくれるのか。

？いや、しかしだな。

？昨日の今日だぞ、本当にそれでいいのか?

「……うむ。私は前衛職だからな。前衛職なんて、どこにでも有り余っている。だが、盗賊はダンジョン探索に必須な割に、地味だから成り手があまり多くない職業だ。私と違い、クリスの需要なら幾らでもある」

？我々のテーブルに同席した金髪の少女、ダクネスの話聞きながら、俺は静かに思案を続ける。

？ちなみに、レンジャーも一部盗賊のスキルを習得することができ

？他にも初級魔法や片手剣スキル、細々とした職人スキルがいくらか……。

「もうすぐ夕方なのに、クリスたちはこれからダンジョン探索に向かうのか?」



「ダンジョン探索は、できることなら朝一で突入するのが望ましいのです。なので、ああやって前の日にダンジョンに出発して、朝までダンジョン前でキャンプするのが定石なのですよ」

？ 臨時のパーティーが成立し、ギルドを出ていく面々をテーブルから見送り、カズマたちがそんな話をする。

「ダンジョン前には、そういった冒険者を相手にしている商売すら成り立っていますしね。……それで？ カズマは、無事にスキルを覚えられたのですか？」

？ めぐみんの何気ないひと言で、俺は閃いた。

「そうだ、スキルだ。よしカズマ、今から君にスキルを教えよう！」